

2012.6.20

日本のべっ甲産業の近代史

宇仁義和（独立学芸員） unisan@m5.dioon.ne.jp

この報告は、平成13年度日本生命財団研究助成「人間活動と環境保全の調和に関する研究」報告書、「研究課題：ベッコウとタイマイの近代史～地球環境問題の歴史的理解～ Modern history of Bekko and hawksbill turtle: a historical explanation for global environment problems 代表研究者：宇仁義和（斜里町立知床博物館学芸員：当時）」の内容を再掲したものである。ただし、誤字や脱字、明かな間違いは訂正し、説明不足の点は言葉を補った。

## 1. 調査日程と内容

- ・東京（2002.3.18-23、4.15-16、6.15-16）聞き取り（べっ甲製造業者2社3名、べっ甲卸売業者1社1名、業界団体1団体1名）、文献調査、資料調査
- ・関西（2002.4.16-21）聞き取り（旧べっ甲輸入業者3社3名）、文献調査、資料調査
- ・長崎（2002.5.13-18）聞き取り（旧べっ甲輸入業者1社2名、べっ甲製造業者1社2名）、文献調査、資料調査
- ・沖縄（2002.6.7-14）聞き取り（海亀剥製業者1社1名）、文献調査、資料調査
- ・札幌（2002.7.29-30、9.19-21）文献調査

上記の現地調査のほか斜里町立図書館経由による文献調査を実施した。

## 2. 調査結果

### 1) 統計

#### (1) 全国統計

- ・水産博覧会第四区出品審査報告統計部（農商務省農務局1984） 明治1-14年の「鼈甲」輸入量と金額が掲載されていた。同13年に関しては国別円グラフが描かれ約50%が印（度）・約25%が西印（度）、期間中の年平均輸入量は9.5トンであったが、資料入手の方法が記されておらず信頼性は高くない。
- ・大日本外国貿易年表および日本外国貿易年表・日本貿易年表・日本貿易月表12月（大蔵省発行、復刻版：原書房発行） 明治15年-平成4年（1882-1992）分を調査し、すべての年次でべっ甲関連の項目を得た。おおよそ10年ごとに集計したべっ甲の年平均輸入量は、1882-1890年12.0トン、1891-1900年6.9トン、1901-1910年3.8トン、1911-1920年5.1トン、1921-1930年13.0トン、1931-1939年13.2トン、1950-1960年31.7トン（1951年にアメリカから142トンを含む177トン、1954年に同68トン含む73トンという大量輸入があり、両年を除いた平均は10.9トン）、1961-1970年32.9トン、1971-1980年代44.1トン、1981-1990年代25.6トンであった。戦前のピークは1930年代、戦後は1970年代にあった。その他にべっ甲製品の輸出入の項目も集計した。

#### (2) 地方統計

主要輸入港の税関統計、長崎の生産者統計、沖縄のウミガメ漁業統計が得られた。

- ・神戸港外国貿易概況および神戸港外国貿易概覧（神戸税関発行）
- ・明治15年長崎区統計表 営業人数、納税額、「鼈甲」輸入・「鼈甲器」輸出金額
- ・長崎区第1回年報 明治17-19年の「鼈甲器」の製造個数と金額が得られた
- ・長崎県統計書 明治22-23、35-36、41-42、44、大正1-昭和14年のべっ甲製造戸数他
- ・長崎市内商工業業種別戸数／従業員数調査票昭和11年11月15日現在（長崎商工会議所）  
「鼈甲原料」と「鼈甲細工」の戸数・人数・規模が記載されていた
- ・最近十年間長崎港輸出入品価格調（出版年不明、前書きに明治25年9月の記）
- ・長崎港貿易の変遷（長崎税関1953・1956）
- ・長崎県貿易要覧（長崎県水産商工部観光貿易課1956）
- ・沖縄県統計書 明治27年-昭和15年（1894-1940）分を調査し、すべての年次でタイマイに関する項目を得た。記録は国頭郡から八重山郡の全域で得られた。
- ・外国貿易年表（琉球政府主税局税関部）
- ・南洋庁統計年鑑（南洋庁：未見） 玳瑁漁業に関する統計を掲載

## 2) 文献調査

### (1) 博覧会

明治期の国内の生産状況を知る資料として利用可能であった。

- ・第2回内国勸業博覧会（明治14年） 熊本県天草郡中田村の宮本栄次郎が図ではタイマイと思われる亀甲を出品した（同列品図録1）。
- ・水産博覧会（明治17年）
- ・第2回水産博覧会（明治） 東京・大阪のほか沖縄・鹿児島・宮崎か出品があり、製品は輸出品が長崎・兵庫・富山・大阪・東京から、国内向けが兵庫・東京・愛知・島根・京都・大阪から出品、歴史・製造法・疑甲製法について多色刷りの図版を含む詳しく報告は『玳瑁亀図説』の近代版（同審査報告 pp291-318・農商務省1899）。また沖縄から本鼈甲・水鼈甲、鹿児島から亀甲が出品された（同出品目録1180pp・同事務局1897）。
- ・第5回内国勸業博覧会 べっ甲製品や利用製品が富山・奈良・静岡・愛知・大阪・長崎・京都から出品された（同出品目録第七部製作工業386pp・同事務局1903）。
- ・第2回南洋水産工芸展覧会（昭和13年・1938） べっ甲製品が出品（南洋水産44号34-43p・1939年）。「水産工芸の輸出振興を期す」（南洋水産48号2-3p・1939年）。

### (2) 地域情報

東京（江戸べっ甲）

浮世絵で見るような櫛・笄・中差しの伝統的和装品の産地として知られる。職人は墨田区、問屋は中央区から戦後は台東区に移った。墨田区では。震災や戦災の影響を大きく被っている。なお、「江戸べっ甲」は東京都伝統工芸品に指定され、職人は各区の登録無形文化財保持者や伝統工芸士の認定対象である。近年の出版物が多い。

東京市商工名鑑、新版東京の職人（大森幹久・福田国土2002）206pp、匠の姿VOL. 1 衣（水谷充・出川健示1999）123pp、日本の髪形と髪飾りの歴史（橋本澄子1998）137pp、日本の美術396女の装身具（長崎巖1999）98pp

## 関西

小間物組合名簿など収集した。

## 長崎

江戸時代から続く地場産業としてべっ甲細工の文献は多くいずれも県立図書館蔵。名工として6代目江崎栄造のほか正封勳造が知られる。現在の知識は渡辺武彦の著作の影響が大きい。垣立寅蔵は彦根出身の近江商人で大正時代に原料の直輸入を始めた。

美術鼈甲品解覧（垣立寅蔵1933）27pp、長崎の海産美術工芸品（上）（渡辺武彦1954）30pp、長崎の鼈甲細工について（一）（二）（渡辺武彦1952、「長崎」創刊号）、長崎のべっ甲（越中哲也1983）87pp 内容の多くを上記2冊に負っている、月間「九州」No.9「写真特集べっ甲」pp27-35

（1958）、鼈甲製品の出来るまで1-7（長崎新聞1934）、江崎べっ甲店経歴（江崎べっ甲店・出版年不明）、長崎商工人名録・昭和16年版（長崎県商工会議所）、長崎市商工名鑑（長崎市役所勸業課）、長崎県人物事業大鑑（東京商業興信所長崎支所1932）江崎栄造と垣立寅蔵の紹介、私の思いで、少年時代（2000年作成・長崎歴史民俗資料館蔵） 1904年生まれのべっ甲職人の自分史

## 沖縄

べっ甲製かんざしが庶民の身分を示す装身具として用いられてきた。ウミガメ漁業が現在も継続しており、べっ甲や和甲（アオウミガメ）の原料供給地にもなっていた。

沖縄県漁業調査書（日付不明・南洋水産協会）、沖縄県水産一斑（大正元年）、宮古郡・八重山郡漁業調査書（大正元年?）、沖縄タイムス・ブックレット11ウミンチュ見聞録（同社2000）、海亀の民俗（川崎晃稔1985・鹿児島民具第6号89-108p）、水産調査予察報告（農商務省）

## 南洋地域

タイマイ供給地を含み、日本人への許認可漁業「玳瑁漁業」もあった。  
南洋の日本人漁業（片岡千賀之1991）、南洋水産（南洋水産協会）

### （3）その他

・環境NGO 日本ウミガメ協議会、UNEP、IUCN、WWF、traffic、JWCS などからタイマイやウミガメ関連の報告書を入手した。

・近代以前のべっ甲 正倉院年報、MUSEUM ほか

上記雑誌などからべっ甲関連の論文を収集した。中世の報告は得られなかった。

### 3) 聞き取り

記述内容は複数の証言のとりまとめである

#### (1) 江戸べっ甲の現状

- ・昔は簪・帯留・櫛といった和装品が多く出たが、現在はペンダント・ネックレスなど洋装品が多い。かつては暮れに和櫛と髪の中挿しのセットなど伝統的な品物を作っておけば売れた。しかも自分で売る必要はなく問屋が買ってくれた。
- ・最後に売れ行きがよかったのはバブルの頃であり、現在は不景気で売り上げは落ちた。その一方で高級品は今でも売れている。
- ・中米のものは何でもキューバ産、あるいは異人甲と呼んでいた。やわらかく仕事がしやすい、合わせもやりよい、さらに色がきれい、現在好まれる赤い部分があるなど素材としてよい。それに比べ太平洋のもの、つまり南京甲は黄色い部分と黒い部分がはっきり分かれ、大きさも一回り小さい。ただし昭和のはじめは白と黒がはっきりしたものが好まれた。
- ・メガネフレームにはキューバ産は向かない。割れやすく、左右の色をあわせにくい。太平洋産の方が割れにくく、メガネフレームに求められる左右対称の模様が作りやすい。
- ・墨田区で前は30軒ほど職人がいて、それぞれの仕事に特化した職人がいたが、いまはいない。べっ甲関係者は戦争で死んだ人も多かった。後継者問題は深刻だ。

#### (2) 関西のべっ甲製品

- ・主力製品はくし、散髪屋で使うようなもの。ほかに宝石箱、コンパクト、万年筆、メガネケース、ペン皿など。実用品が多かった。変わったところでは京都のお茶の先生からの注文で茶しゃくを作った。仁丹入れやコンパクトもよく売れた。これらの製品はろくろを回して作る。削りだし、ねじ切りなどあり今は作れる人がいないのではないか。全盛期は昭和30-40年代だろう。40年代はくしなどの日常品は売れなくなっていた。
- ・べっ甲製品の完成までの工程は分業体制ができていた。セルロイドとべっ甲は取扱が似ていて、べっ甲職人がセルロイドの人形を作ったりした。
- ・関西の製品は実用品が中心であった。べっ甲は素材にすぎなかったというべきだろうか。そのためセルロイドが普及しだすとべっ甲製品が廃れるのも早かった。

#### (3) 長崎べっ甲盛衰史と戦前の輸入業

- ・卸先は国内大都市の全部
- ・海外は満州、北支、台湾で日本人相手に販売した。中国人は買わない。
- ・シンガポールにも出荷したが、ここではヨーロッパ人が買って行く。外国人向けには三段箱の葉巻入れ・12点化粧セット・宝石箱などで、これは国内でヨーロッパ人むけのおみやげとしても販売した。化粧セットは貼りべっ甲で作る。
- ・原料の輸入はほとんどがシンガポールからで、甲良は華僑が集めていた。専門でやっていた

- ・水牛の角も輸入品。内地品もあったが、オーストラリア・インドネシアから送っていた
- ・長崎では三味線のバチはつくらない、沖縄のかんざしもつくっていない
- ・異人甲とはあまり言わず、シャム甲といった。インド洋のものも含む？
- ・ネックレスは誰も製造に成功しなかった。部品をつなぐ小さなリングが必要だが、その製造は業界では不可能とされていた、しかし江川磯治が昭和35年くらいに成功させた。彼の功績は偉大で、銅像を作ろうかという話があったほどだ
- ・しかもベテランの職人でなくても作れるもので、ヒット商品になり製作所をはじめた。当時は戦前のストックの材料を使っていた、ネックレスの鎖は薄くなくてはならないので、当時あった端材でも間に合ったのだ
- ・海外ではヨーロッパでべっ甲を製造していた、製造確認したのは、イタリアとフランス。イタリアではナポリ、大きい工場があった、製品は男物さばき櫛など、カメオも一緒にやっていた。フランスでは薬入れ・オペラグラス・、べっ甲専門の家内工業で細々とやっていた。
- ・通産省囑託の辞令をもらい、業界代表として第1回ワシントン条約会議に出席した。羽田空港には見送りが300人もいて重圧だった。
- ・大村秀雄も出席し、タイマイもクジラのように国際会議の場を設ければ資源管理をしていける、そのように政府を動かすべきといわれた

#### (4) 沖縄のかんざしと海亀漁業

- ・べっ甲製かんざしの実物資料は沖縄県竹富町竹富島の喜宝院蒐集館に4点、東京国立博物館に2点収蔵されている。かんざしの製作場所はわからない。
- ・カメ剥製がよく売れた時代は戦後復帰前、昭和30年代後半からだ。全部本土向けに出荷した。戦前は剥製の商売はなく、たまにとれたカメを自家用に飾ることはあった程度だ。
- ・沖縄本島では外国からカメを入れていた。復帰前から復帰後4・5年ころまで入ってきていたが、輸入が厳しくなってなくなった。
- ・ウミガメ獲りは奄美大島まで出掛けた。獲れたカメは沖縄本島に出して、そこから本土に出荷した。最盛期にはカメ専門のひとが何十人も行った。沖縄本島に出漁して、そこから奄美大島に出掛けた。1年に3か月くらいの出漁で、そのうち操業するのは15日。残りの日程は行き帰りの時間や天気待ちでなくなった。1回の出漁で80-100匹捕獲した。
- ・アオウミガメは肉を売る、甲羅は使わない。戦前・戦後とも。大きいカメを狙った。

#### (5) 戦後のべっ甲輸入業と流通

- ・仕入れは長崎・大阪・東京から職人から品物を購入し、それを全国の間屋に卸す。中心は名古屋、京都、大阪、長崎など。べっ甲専門の間屋は今も少なく3社くらいだろう。
- ・現在主力の商品はネックレス、イヤリング、ブローチ。男物は出ない、圧倒的に、95%は婦人もの。メガネは今でも売れており、売れ行きは10年前に比べて変わらない。べっ甲の拡大期は昭和30年代、あるいはバブルまではそうだったかもしれない。現在は縮小期にあり、全体の金額は減っている。べっ甲

は軽いからお年よりに人気がある。

・産地の仲買人は華僑が多い、インド洋や太平洋のフィジーはインド人だった。中南米のパナマは華僑が、他の小国は現地人だった。パナマは中米のべっ甲の集散地の中心だった。

・ワシントン条約で輸入制限が始まると、通産省から実績に合わせて輸入割当が与えられた。実績を算出するために実態調査が必要となってそれで輸入業者が判明した。

・キューバ産のべっ甲を日本に持ち込んだのはおもにオランダのウイツラ Wetzlar社だった。きちんと等級分けしてあったので、他の集散地からの取り引きに比べ値段は高かった。等級分けは後になってキューバの国営企業もするようになった。

### 3. まとめ

べっ甲製品は近代以降に多様化し、1) ヨーロッパ人向け工芸品、2) 洋風文具・携行品、3) 海外在留邦人向けみやげ品、4) 男性用装身具、5) メガネ、6) その他雑貨、などが作成され、生産量を拡大していった。べっ甲生地は輸入量も増大し、べっ甲生地の輸入は年々増加したほか、新製品には和甲製（アオウミガメの甲）も多く、国内外でアオウミガメの捕獲圧上昇にも影響を与えたと考えられた。しかし日露戦争によっておもにロシア人を相手にした1) が衰退、大正時代には2) や3) にもセルロイドなど競合素材が登場した。1) の衰退の影響は長崎に、2) と3) の縮小は全国の生産者に影響を与えた。加えて第二次世界大戦による生活変化や材料不足、生産地の戦災や職人の戦死、戦後の輸入停止などによってべっ甲業界は存亡の危機を迎えた。べっ甲の輸入は昭和24年頃に再開された。業界に転機が訪れたのは昭和30年代であり、ネックレスの生産に成功したことが大きかった。ネックレスは材料が少量で済み、高度な技術を必要とせず、大量生産が可能であり、しかも高度経済成長による嗜好品の購買欲が後押ししたことで、べっ甲の消費が急増し業界は大きく成長した。同時にべっ甲材料の輸入は1957年に初めて10トンを超え（1951・1954年を除く）、1960年に23.6トン、1962年に32.8トンと急増した。業界の好景気は少なくとも昭和50年代まで継続し、メガネフレームなどはバブル経済期が最盛期だった。一方、実用品や男性用品のほとんどは、プラスチックの普及によって生産されなくなった。べっ甲製品は成立過程と素材利用目的によって、べっ甲使用の必然性に差があり、類型化できることが明らかにされた。

日本はべっ甲原料のタイマイのほとんどは海外に頼ってきた。近代初期は国内業者による輸入はわずかで大半は華僑が行っていた。輸入先はアジア地域が半数を占めたが、カリブ海産も4分の1程度ありヨーロッパ経由で輸入されていた。「異人甲」の呼称もこれにちなむ。戦後は中米産が輸入量の約40-60%を占めた。輸入はごく少数の業者が携わるのみで、国内での材料の流通は市場ではなく分配的だった。また、国内業者が捕獲に直接関わることはなかった。国内では所轄官庁により業界団体が作られず、輸入規制や生産調整も実施されることなかった。もし、国際捕鯨委員会のような国際的管理機関があり、国内にも剥製を含めた利用に関する調整の場があったならば、タイマイ資源の持続的利用が継続できた可能性が考えられた。

現在のべっ甲製品は、メガネフレーム・日本髪とセットになった伝統的工芸品・おみやげ用アクセサリにほぼ収斂し、職人は数・職種ともに大きく減少した。生産地は東京都と長崎県で大半を占め、両

地方とも後継者問題を抱え、流通業者は素材感が似たコハクに仕事を移していた。べっ甲製品の将来は、伝統的装身具の生産と端材利用のアクセサリに特化し、職人の手業は文化的価値付けが得られる分野でのみ存続していくと考えられた。

なお、国内では沖縄県で明治時代から現在に至るまでタイマイ漁業が継続されており、1960年代には奄美大島までを漁場としてウミガメ漁業が行われた。また、べっ甲が本州とは異なる文化的意味を持っていた。海外でのべっ甲製品はベトナムやタイマイ原産地でのみやげ品のほか、少なくとも中世から近年までヨーロッパでも製造されていた。現代ではフランス・イタリア・ドイツを中心にべっ甲生産があり、張り合わせ技術も用いられており、日本が輸入する以前からカリブ海や太平洋、あるいはインド洋でヨーロッパ諸国によるタイマイ資源の利用があり、現在の分布状況に影響を与えた可能性が考えられた。

将来に向けた提案として、べっ甲加工業が存続するには、べっ甲製品を類型区分しそれぞれの価値付けを明確に行い、べっ甲素材使用の必要性を勘案したうえで、タイマイの持続的利用の可能性を検討すべきとおきたい。タイマイが減少した原因には、生息環境悪化と消費の拡大の両面があり、消費内容にはべっ甲生地目的と剥製目的の2つがある。各要因の資源減少への影響計量は今後の課題となったが、国内で消費される伝統的工芸品の製造に必要な個体数であれば、持続的消費利用は可能ではないだろうか。

## 謝辞

調査実施にあたり多くの関係者や図書館、研究機関などにたいへんお世話になりました。記してお礼申し上げます。

べっ甲関係者の方々、江崎べっ甲店、垣立工芸品株式会社、東和パナマ化工株式会社、(株)熊谷本店、京美貿易株式会社、(有)岡べっ甲製作所、(株)木間商店、磯貝べっ甲専門店、(社)日本べっ甲協会、石垣市立図書館、沖縄県立図書館、同八重山分館、長崎県立図書館、神戸市立中央図書館、大阪市立中央図書館、京都市立中央図書館、京都府立図書館、東京都立中央図書館、斜里町立図書館、北海道大学附属図書館、札幌大学附属図書館、東京大学農学部図書館、同経済学部図書館、一橋大学附属図書館、京都大学附属図書館、日本ウミガメ協議会附属八重山海中公園研究所、竹富島喜宝院蒐集館、長崎市歴史民俗資料館、長崎県立美術博物館、大阪ブリキ玩具資料室、日本髪資料館、サントリー美術館、東京国立博物館(順不同)

## ニッセイ報告書付録

### 1. 調査での収集資料

#### 1) 統計

##### (1) 全国統計

- ・水産博覧会第四区出品審査報告統計部（農商務省農務局1984）
- ・大蔵省

大日本外国貿易年表 明治15-昭和3

日本外国貿易年表 昭和4-35

日本貿易年表 昭和36-39

日本貿易月表12月号 昭和40-平成4

上記のうち明治15年-昭和23年分までは原書房から復刻版が発行されている。べっ甲の地域別輸入量と輸入割合については、戦前と戦後に分け収録した。

##### (2) 地方統計

- ・神戸港外国貿易概況
- ・神戸港外国貿易概覧（神戸税関発行）
- ・沖縄県統計書

明治27年-昭和15年（1894-1940）分を調査し、すべての年次でタイマイに関する項目を得た。明治27-大正3年は「海亀」または「亀」、大正4-昭和15年は「玳瑁」または「タイマイ」であり、数量は明治37年までは頭数、それ以降は斤で、地域は明治37年までは漁浦あるいは浜浦で、明治38-43年は間切または村で、明治44年以降は郡で、金額はすべて円で記録されていた。捕獲記録は国頭郡から八重山郡の全域で得られ、島尻郡での捕獲が目立った。

- ・外国貿易年表（琉球政府主税局税関部）

1966-1970年分の統計を調査し、すべての年次でべっ甲関連の項目を得た。米国統治下の統計のため、本土向けも輸出入の扱いで掲載されていた

##### ・外地統計

南洋委任統治のタイマイ漁業統計は昭和9-13年の「玳瑁」漁獲高表があり、捕獲数は年間129-250頭・3121-2539円であった（南洋水産62号36-47p・1940年）。他の記録では青海亀を含む「亀漁業」として年産2000-20000円で、年々減少し増殖施設の必要を指摘する報告があった（南洋水産47号9-17p・1939年）。

#### 2) 文献調査

##### (1) 業界名簿

小間物業界年鑑や商工年鑑で業者名が収集できたほか、博覧会の出品記録では職人個人の名前が参照可能であった。

## (2) 博覧会

- 佐々木信之助, 1881, 第2回内国勸業博覧会同列品図録1,  
第2回水産博覧会事務局, 1897, 第2回水産博覧会出品目録, 1180pp,  
第2回南洋水産工芸展覧会(昭和13年・1938)  
第5回内国勸業博覧会事務局, 1903, 第5回内国勸業博覧会出品目録第七部製作工業, 386pp  
農商務省水産局, 1899, (七) 玳瑁鼈甲及其製品附蟻龜嘴擬甲, pp291-318, 第2回水産博覧会審査報告第2卷第3冊工業用品及其製品並雜用品,  
農商務省農務局, 1884, 水産博覧会第四区出品審査報告統計部,

## (3) 地域情報

### <東京>

- 貴道裕子, 1998, 鼈甲細工・蒔絵嵌装, pp115-146, 京都書院アーツコレクション175帯留, 京都書院・京都, 239pp,  
橋本澄子, 1998, 日本の髪形と髪飾りの歴史, 137pp  
小間物・化粧品業界年鑑, 東京小間物化粧品商報社, 東京,  
水谷充・出川健示, 1999, 匠の姿VOL. 1衣, 123pp  
大森幹久・福田国土, 2002, 新版東京の職人, 206pp  
中江克己, 1998, ベっ甲職人磯貝庫太, pp7-28, 江戸の職人, 中央公論社, 東京, 238pp,  
長崎巖, 1999, 日本の美術396女の装身具, 98pp  
東京市商工名鑑

- 板橋区立郷土資料館, 1995, 特別展いたばしの伝統工芸, 板橋区立郷土資料館, 東京, 63pp,

### <関西>

- 京都商工会議所, 京都商工人名録, 京都,  
京都装粧品裁縫雜貨協同組合, 1967, 京小間物業界の今昔, 京都, 167pp,  
京都装粧品裁縫雜貨協同組合, 1982, 業界の今昔II, 京都, 91pp,  
山中県治, 1926, 大阪小間物卸商同業組合員名簿?, 大阪化粧品小間物新聞社, 大阪,  
山東武雄, 1935, 大阪問屋仕入案内, 大阪商業振興会, 大阪,  
実業社, 大禮記念大阪商工組合大鑑, 大阪,  
神戸市經濟部産業課(商工課), 戦前, 神戸商工名鑑, 神戸,  
神戸商工会議所, 1911, 神戸商工録, 神戸,  
神戸商工会議所, 戦後, 神戸商工名鑑, 神戸,  
大阪市役所商工課, 大阪市商工名鑑, 工業之日本社, 大阪,  
大阪商工会議所, 大阪商工名録, 大阪  
大阪小間物新報壹千号記念特輯昭和八年版大大阪業界仕入総覧, 大阪小間物新報社, 大阪,  
萩原静三・小原千蔵, 1928, 大阪小間物卸商同業組合沿革史, 大阪小間物卸商同業組合, 大阪,  
730pp,

由田清一, 1950, 大阪小間物装粧品変遷史, 大阪装粧品協同組合, 大阪, 394pp.

<長崎>

(資料は注記のない限り長崎県立図書館蔵)

越中哲也, 1983, 長崎のべっ甲, 長崎鼈甲商工協同組合・長崎玳瑁琥珀貿易協同組合・長崎鼈甲装飾品事業協同組合, 87pp

越中哲也, 1992, 玳瑁考-長崎のべっ甲を中心にして-, 純心女子短期大学付属歴史資料博物館, 154pp

下川達彌, 1984, 飴色の光沢-長崎のべっ甲細工-, pp, 日本の伝統工芸11九州1, ぎょうせい, 東京, 175pp.

垣立寅蔵, 1933, 美術鼈甲品解攬, 私家版, 長崎, 27pp

橋本白杜, 1981, 長崎べっ甲物語, 第一法規出版, 東京,

江崎べっ甲店, n.d., 江崎べっ甲店経歴, 私家版, 長崎, 25pp.

泉秀樹, 1996, 江崎べっ甲店, pp209-228, 不倒企業の知恵, 廣濟堂出版, 東京,

長崎県, 1949, 長崎県経済部商工課資料第八号長崎県の貿易について, 長崎,

長崎県教育庁文化課, 1996, 美術工芸で見る長崎の美, 長崎県教育委員会, 長崎, 117pp.

長崎県商工会議所, 長崎商工人名録・昭和16年版

長崎市役所勸業課, 長崎市商工名鑑

長崎市役所総務部調査統計課, 1959, 10鼈甲細工, pp264-266, 長崎市制六十五年史, 長崎市, 長崎, [

長崎市役所調査統計課, 1950, (九) 雑工業 (1) 鼈甲製品, pp36・41-47, 長崎市経済事情調査書第3輯長崎市の中小企業, 長崎市, 長崎,

渡辺武彦, 1952, 長崎の鼈甲細工について (一), pp37-46, 「長崎」創刊号, 観光長崎出版社

渡辺武彦, 1952, 長崎の鼈甲細工について (二), pp9-15, 「長崎」?号, 観光長崎出版社

渡辺武彦, 1954, 長崎の海産美術工芸品 (上) 鼈甲細工・伝統と現勢商工長崎F観光編, 商工長崎刊行会, 30pp

東京商業興信所長崎支所, 1932, 長崎県人物事業大鑑,

無署名, 1934, 鼈甲製品の出来るまで1-7, 長崎新聞 垣立商店の取材記事、ウミガメ捕獲写真掲載

無署名, 1958, 写真特集べっ甲, 月間「九州」, 9:27-35

無署名, 1991, 長崎のべっ甲業界悲痛の叫び, 財界九州, 802:24-27, 財界九州社,

無署名, 不明, 長崎のべっ甲細工・社会科への招待, 掲載紙不明新聞記事,

林源吉, 1928, 鼈甲細工, 15-17, 長崎名物考 (其一) 長崎談叢第1輯, (復刻版: 雄松堂書店 1968) .

長崎区役所, 長崎区第1回年報

長崎区役所, 明治15年長崎区統計表

長崎県, 長崎県統計書

長崎県, 長崎県貿易関係者名簿,

長崎県水産商工部観光貿易課, 1956, 長崎県貿易要覧, 長崎,

長崎商工会議所. 長崎市内商工業業種別戸数／従業員数調査票昭和11年11月15日現在

長崎商工会議所. 長崎商工名鑑

長崎税関. 長崎港貿易の変遷

不明. 1892. 最近十年長崎港輸出入品価格調.

私の思いで、少年時代（2000年作成. 長崎歴史民俗資料館蔵） 1904年生まれのべっ甲職人の自分史、  
両親の聞き伝えを含む

< 沖縄・奄美 >

沖縄県立図書館ホーレー文庫蔵)

川崎晃稔. 1985. 海亀の民俗. 鹿児島民具, 6 : 89-108.

南洋水産協会. n d. 沖縄県漁業調査書 (日付不明)

農商務省. 水産調査予察報告.

無署名. 1912. 沖縄県水産一斑

無署名. 1912. 宮古郡・八重山郡漁業調査書 (大正元年?)

### (3) 南洋

- ・「Journal of Science VID pp.291-295, 1911」からの抄訳として、1909年にフィリピンから2040トン・34942フィリピンペソの海亀が輸出を報告していた (南洋水産資源第1巻205-208p・1929年)

### (4) 考古学・正倉院宝物

越中哲也・菊池藤一郎・永沼武二. 1991. 正倉院の 瑠宝物の工芸技法について. 正倉院年報, 13 : 21-42・口絵. 宮内庁正倉院事務所. 奈良.

岡崎敬. 1973・東西交渉の考古学. 平凡社. 東京. 447pp.

内田至. 1991. 正倉院宝物の海ガメ類材質調査報告. 正倉院年報, 13 : 1-20・口絵. 宮内庁正倉院事務所. 奈良.

木村法光. 1982. 正倉院の 瑠螺細八角箱. 正倉院年報, 4 : 15-24, 口絵. . 宮内庁正倉院事務所. 奈良.

木内武男. 1964. 瑠瑠張経台と華角張りの手法について. MUSEUM, 161 : 19-23. 美術出版社. 東京.

### (5) 商取引・貿易・CITES

King, F. Wayne. 1979. Historical review of the decline of the green turtle and the Hawksbill. pp183-188. In: Bjorndal, Karen A.(ed.). Biology and conservation of sea turtles. Smithsonian Institution Press. Washington. 615pp.

Mack, David. Duplax, Nicol and Wells, Susan. 1979. Sea turtles, animals of divisible parts: International trade in sea turtle products. pp545-562. In: Bjorndal, Karen A.(ed.). Biology and conservation of sea turtles. Smithsonian Institution Press. Washington. 615pp.

Milliken, T. & Tokunaga. H. 1987. The Japanese sea turtle trade 1970-1986. TRAFFIC(JAPAN).

Tokyo. 171pp.

トムミリケン・徳永嗣臣, 1987, ミクロネシアン・マリカルチャー・デモンストレーション・センター (MMDC) におけるタイマイ種苗放流事業プログラムの調査, 18pp.

坂元雅行, 2000, タイマイ取引復活? 日本における「べっ甲」国内取引管理制度の分析, 野生生物保全論研究会, 東京, 10pp.

志賀節, 1991, 「ノルトヴェイク会議」のことなど, pp426-429, 環境庁二十年史, ぎょうせい, 東京, 日本たいまい協会 (梶原武ほか), 1973, インドネシア・フィリピン・マレーシア・シンガポールのたいまいに関する調査報告書, 58pp, 日本たいまい協会, 長崎.

## (6) 新聞記事

東和パナマ化工株式会社から次のタイマイ関連のスクラップ・ブックをコピーさせていただいた.

アエラ, 1991.6.25, 瑁輸入禁止で鼈甲業界の行方.

神戸新聞, 1983.8.12, 珍しいミナミイシガメ初めて人工フ化に成功.

神戸新聞, 1984.10.30夕刊, 人工衛星で海亀追跡.

神戸新聞, 1984.7.9, 神戸の姉妹都市リガ市を訪ねて (柴田仁).

神戸新聞, 1985.10.2, 須磨海岸でウミガメふ化戦後初の確認.

神戸新聞, 1986.2.10, バリでタイマイ養殖へ.

神戸新聞, 1991.3.28, タイマイ輸入禁止へ.

神戸新聞, 1991.4.2夕刊, 米大統領タイマイ輸入禁止要請.

神戸新聞, 1991.6.19, 93年から全面禁輸.

神戸新聞, 1991.6.20, タイマイ禁輸通産省が不正取引防止策.

朝日新聞, 1973.10.2, タイマイ生息海域つきとめる.

朝日新聞, 1973.10.3夕刊, 海ガメ徹底する南の国の保護政策.

朝日新聞, 1973.3.4, 野生動植物保護条約輸出入規制へ72国署名.

朝日新聞, 1979.2.27夕刊, 米産カメで日米交渉を.

朝日新聞, 1979.4.28, 高級魚を茶 (以下不明) みがかかかる増産技術 (小笠原のアオウミガメ, 横浜のカメ料理).

朝日新聞, 1979.7.28, タイマイ保護策探る.

朝日新聞, 1980.3.30, 「ワシントン条約」批准見通しの背景.

朝日新聞, 1980.4.5, タイマイ乱獲でピンチ.

朝日新聞, 1981.9.10夕刊, ハリマオとベッコウ (内田至).

朝日新聞, 1982.10.20, 青鉛筆 (アカウミガメ千島沖でイカ釣り船で捕獲)

朝日新聞, 1983.11.14, クジラ保護マイクル・クーパー氏.

朝日新聞, 1983.11.14, 虚栄の市マーケット日本19絶滅よそに生物輸入.

朝日新聞, 1984.1.24, ベッコウガメはがれた甲羅再生する.

朝日新聞, 1984.4.1, 人工衛星で竜宮城探しウミガメの背に発信装置.

朝日新聞, 1986.1.14. ベッコウ資源自前でバリ島でタイマイ養殖.

朝日新聞, 1991.6.19. タイマイ輸入92年度で打ち切り.

読売新聞, 1987.8.19夕刊, アオウミガメの人工ふ化着々 (小笠原海洋センター).

日本経済新聞, 1977.10.8. 戦争の落とし子とまぶたの父 (有川秀信: ベッコウ輸入業者).

日本経済新聞, 1991.4.2夕刊?, 「海亀」輸入も取り上げ.

日本経済新聞, 1991.6.20. タイマイ禁輸93年1月から.

日本経済新聞・1987.7.25夕刊, 砂浜に息づく生命ウミガメの卵を守れ (国内).

日本装粧品 (以下不明), 不明, 84ベッコウフェア注目集めた養殖パネルや製作実演.

不明, 1979.1.11. ハゼやカメ触れてもOK姫路市立水族館.

不明, 1979.1.6. 日米カメ競争青い目優勢.

不明, 1979.8.25. ウミガメ残酷物語.

不明, 1979.9.28. 珍種のカメ盗まれる.

不明, 1980.1.19夕刊, 爬虫類皮革に暗雲動物保護強まり輸入に制約.

不明, 1982.10.20. 放流アカウミガメ千島沖で捕獲.

不明, 1983.10.21. 自慢の一匹 (鹿児島県硫黄島でベッコウを釣る).

不明, 1985.2.15. ウミガメの潜水病警戒.

不明, 1985.5.22. 希少生物の輸入大国ニッポン汚名返上へスクラム.

不明, 1985.5.4. 日本の改善措置評価「野生動植物会議」終える.

不明, 不明. どうしてはかるのカメ.

不明, 不明. ウミガメドック入り (神戸の造船所に甲長42cmのカメ).

不明, 不明. 自然随筆カメの甲ら (内田至).

不明, 不明. 守ろう緑追いつめられる動物海外の現場から4アオウミガメ.

毎日新聞, 1980.2.9夕刊, ウミガメ危機商社が買いあさり.

毎日新聞, 不明. 記者の目絶滅の危機野生動物保護は輸入国日本の責任 (川名英之)

## 2. 調査の概要と要約

今回の調査は、平成13年度日本生命財団研究助成「人間活動と環境保全の調和に関する研究」のひとつとして実施しました。調査期間は平成13年10月-14年9月、課題設定は次のとおりです（財団あて提出の課題要約より）。

### ベッコウとタイマイの近代史～地球環境問題の歴史的理解～

現在、ベッコウ加工業とタイマイ保護管理は、自然保護か伝統産業の存続かという国際問題として現れている。しかし、ベッコウ加工業は8世紀に中国で発生して以来千年以上の歴史があり、自然資源の持続的利用を実現してきた産業だったと考える。

この研究の目的は、ベッコウ産業に資源利用上の問題が生じ、地球環境の保全と対立するようになった経過を解明することにある。調査は、国内の関係者からの聞き取りと資料調査、隣接分野の文献調査からなり、アジア太平洋地域のタイマイの利用と流通、そして過去の生息状況と環境の変化も明らかにしたい。

研究の成果は、ベッコウ産業への新たな認識の形成と、タイマイの保護管理対策に役立つ具体的な資料の提出につながるだろう。

調査概要は次のようにまとめました（国立情報学研究所の民間助成研究成果データベース登録原稿）。

日本のべつ甲産業がタイマイの絶滅を導くとする図式が形成された要因を、べつ甲産業の近代史から考察するため、公式統計や博覧会資料、地方出版物などの文献調査、東京・関西・長崎・沖縄の関係者からの聞き取りを実施した。

べつ甲産業は近世に成立し製品の種類も消費量は限定的であった。ところが、明治以降は商品の種類・量・市場ともに多様化し消費量も増大し続け、結果としてタイマイと代用品のアオウミガメの減少に影響を与えたと考えられた。とくに、戦後1960年頃にネックレス製造方法の確立は、高度経済成長期にあたり大量生産・消費を導いた。しかし、タイマイの捕獲や集積は一貫して現地漁業者や現地商人に一任され、輸入業者や製造職人を含め、日本国内にはタイマイの生息状況についての情報が欠けていた。タイマイの資源管理を実施する国際機関は設置されず、国内でも独自の輸入規制や生産調整は行われなかった。そのためワシントン条約採択以降、消費国として資源管理方法を説明できず、地球環境問題の原因者として批判されることになった。

タイマイの減少には、生息環境の悪化や剥製用小型個体の捕獲も影響を与えており、べつ甲産業にのみ原因を求めるべきではない。しかしながら、べつ甲産業が存続するには、製品を類型区分しそれぞれの文化的価値付けを行い、べつ甲使用の必然性と消費量を勘案したうえで、タイマイの持続的利用の可能性を検討すべきと考えられた。

（原報告2003.1.23記）